

ルイス・キャロルの世界（4）

聖職，演劇，子どもの写真

笠井勝子

ルイス・キャロルといえば、『不思議の国のアリス』、『鏡の国のアリス』の作者として知られている。彼の作品には、二つのアリス物語の他にも『シルヴィーとブルーノー』の正・続篇、詩集『ファンタズマゴリア』、またキャロルらしいユニークなノンセンス詩として、『鏡の国のアリス』に出てくる怪獣退治の物語詩「ジャバウォッキー」や正体不明のスナークを探しに航海した一行の物語『スナーク狩り』がある。この『スナーク狩り』は、最後の一行から、織り出された、意味不明の物語詩。1874年、ギルフォードのチェスナッツに戻ってきたキャロルは結核のためそこで療養していた従弟のチャーリー・ウィルコックスを夜通し看病の末、散歩にでた。丘を歩いているときに、ふと意味もなく浮かんできたことば、「そのスナークはブージャムだったのだからね」をキャロルはメモをして長いことあたためておいた。意味をなさないが、それでいてなにか意味有り気なもの、ノンセンス詩はまさにそれである。8人の登場人物はみなBの文字ではじまる職業なり、動物である、ということからして雑多のことがわかる。しかも彼等のすることなすことの描写ときたら、まさに詩のための語呂合わせででき上がっているわけだから、そこへ如何なる分析を試みよう、作者自体が、意味はないと言い、解釈は勝手気ままである。

作品とは言えないが、モートン・コーエンが1979年に編纂した『ルイス・キャロルの手紙集』には、もう一つのキャロルの魅力が秘められている。とりわけ、子どもたちに出し

た手紙には、キャロルの遊び心が詰まっている。その遊び心は、こどもの頃に家庭の中で育まれていた。キャロルの父は後に息子が同じ道をたどるオクスフォードのクライスト・チャーチ出身で、ダブル・ファーストを達成した秀才であった。特別研究生の身分を捨てて結婚し、農村の教区牧師となり11人のこどもを持った。恵まれた研究環境を離れた彼は、貧しい教会禄を補うために生徒の読み書きをみなければならなかった。その教室には牧師館1階の一番よい部屋が当てられていた。このような境遇の中で、家族が愚痴をこぼすどころか、感謝と喜びの生活を送れるとすれば、彼等の想像力がものをいうことになる（もちろん、それを信仰の力、ということもできるが）。3番目に生まれた長男のキャロルとしては、家族の助けになれること、といえは弟妹をはじめ家族全員を楽しくさせることである。手軽で、みんなが楽しめる、それが少年キャロルにとってことば遊びへの入り口であった。それが、家族雑誌へ、人形芝居へ、と成長していった。当時、最新の交通手段を取り入れた汽車ごっこを工夫し広いクロフトの牧師館の庭で遊んだときに、キャロルが考え出したルールは、遊びのルールというよりも、ルールそのものの奇妙きてれつさで、エンタテイナーの才能を発揮させ、多いに皆を笑わせたのにちがいない。「どうして」、「何故」を問うことよりも、みなはただ、涙が出るほど笑い転げる、それが少年キャロルであり、その家族であった。批評家の如何なる分析も、笑い転げることを経験できない人の手によるもの

は、キャロルの真髓をとりこぼすことになるだろう。

ルイス・キャロルが、今から百年前の1898年に英国のギルフォードで亡くなったということは、広く知られている。さらに、彼の本名はチャールズ・ラトウィッジ・ドジスンといい（英国では、ドドウスンと呼んでいる）、大学に入学して以来、オクスフォードのクライスト・チャーチ学寮を生活と仕事の根城としていた、ということもよく知られている。数学を学び、滅多にはでない、といわれる優等第1級を二科目でとるダブル・ファーストを達成した。その優秀さで、学部生のときから、すでに生涯大学に残ることができる特別研究生の資格をもらっている。修士号を取得する以前から、学寮内では修士待遇で、教員スタッフに名を連ね、数学を教え、授業の工夫をした教材作りをした。数学研究の上で、彼にとって不幸だったことは、「本当に優秀な学生が数学をやろうというのなら、ケンブリッジへ行くように薦める」という恩師バーソロミュー・プライスのことばのとうり、当時のオクスフォードでは良い数学の仲間に恵まれなかったことである。数学の研究は余り振るわず、キャロルが受け持つ学生たちは好きではない数学をやっていたわけだから、数学そのものを教えるということにおいては、なかなかの苦勞があった。再三呼びだしても、決めた日時に現われない学生を日記の中で嘆いている。

キャロルが席をおいたオクスフォードのクライスト・チャーチ学寮は、他の学寮と同様、その始まりにおいて修道院・教会との関わりが深く、特にクライスト・チャーチは大聖堂を擁して学寮長は聖堂参事会の長を兼ねている。特別研究生の資格で、二つの階にまたがる幾部屋もの住まいと年間のささやかではあるが生活費、それに、してもしなくてもいい自由な研究を保証された代わりに、聖職の資格を取得し、独身を義務づけられていたのも、

こうした大学の創立が宗教の基盤の上にあったことの表われである。

聖職資格の種類と階級は、つぎのようなものである。

資格試験は2種類あり、最初の試験に合格して得られるのは、*holy orders for deacon* で、*reverend* の呼称を得る。キャロルが取得したのは、これであった。この*deacon* の次に彼が、その資格を取るべきかを迷い、友人のヘンリー・パリー・リドンやオクスフォードの司教、ウイルバーフォースにも相談の結果、これを取り止めたという試験は、英国国教会の中で次の階級に進むためのものである。その階級とは、順次、*vicar*, *rector*, *rural deacon*, *arch deacon*, *canon*, *bishop*, *archbishop*. これらの職は、教区を担当し、教区民の司牧に携わる。それに対して、*deacon* の場合は、キャロルがそうであったように、担当する教区、教会があるわけではない。ただ、自発的な奉仕として、依頼をされれば日曜日に教会の礼拝、説教を手伝うことができる。また、手伝わなくとも、それが義務ではない。

A Deacon may take services, give sermons, baptize, and marry couples. It is usually only a temporary position, most go on to be ordained a priest¹⁾.

すなわち、英国国教会の執事職にあるものは、礼拝をおこなうこと、説教をおこなうこと、洗礼を授けること、結婚を司ることができる。通常は、次の司祭職に進むまでの一時的な身分である。

キャロルは最初の試験をカズデンで受験して（1861年9月）、合格した年は大いに張り切って、日曜日になると、オクスフォード郊外にある友人の教会へ手伝いに出かけているし、必要ならば、定期的に手伝いをする事ができる、とオクスフォードの教会に申し出をしている。その返事の中に、礼拝では、牧

師は詠唱を唱えるのではなく、歌うこと、という条件が入っていたために、これは断わった。

このdeaconとvicarの間には、curateという立場の人がおり、副牧師に相当する。それも、2番目の試験を受けて資格を取得する。

2度目の聖職資格を取得することに対する迷いについては、いくつか理由が挙げられる。その一つに、彼の芝居好きがあった。その当時の教会では、劇場へ出入りすることは好ましくないこととされていた。1844年に出版されたヘンリー・ウード・ビーチャーの『若き人々へ向ける7つの説教』(Seven Lectures to Young Men by Henry Ward Beecher)に、その理由を見ることができる。これは1843年から44年にかけて日曜日の夕べの礼拝でビーチャーが若い人々に向けておこなった一連の説教である。清教徒的思想に基づいて、ビーチャー牧師はつぎのような悪魔の罠に陥らないように、と警告をする。

These pitfalls were the familiar ones of orthodox revivalist fervor: idleness, intemperance, luxurious living, prostitution, stealing, cheating, scoffing at religion, horseracing, gambling, attending the theater and the circus, and reading immoral (especially French) novels. The only safety against such temptations lay in Christian faith, fortified by industry, sobriety, thrift, and piety.

すなわち、盗みや詐欺、そして宗教を嘲弄すること、競馬、ギャンブル、に続いて劇場へ行く、サーカスを観に行くこと、が槍玉に挙がる。

キャロルはこの点について、高教会派の父、ドジスン氏と相入れなかったであろうし、同僚で2才年長の神学者で高名な説教師、共にロシアへ2か月の旅をしたヘンリー・パリー・リドンとも見解を異にした。キャロルにとっ

て、演劇とは、それが健全なものであれば人の心を高揚させ、純粋な喜びを与えるものであった。芝居の中にそのような喜びを見出したのは、弟妹のために自ら夢中になって人形劇を作成していた時期から、そのまま続いている。

英国国教会の牧師の家に生まれ、キリスト教の信仰を柱とした家庭で育ったキャロルの生涯を通して彼が持ち続けた信仰は、高教会派に属する牧師の父とはやや異なっていた。彼のリベラルな信仰は、アリスを読むこともたちへ向けて書いた『復活祭を祝う手紙』の中にみることができる。

こんな風に考えてみてください、今読んでいるお手紙は、あなたが会ったことのあるほんとうにいる友だちからのほんものの手紙だ、という風に。ちょうど今あなたへ、わたしが心から復活祭のお祝いを言っているそのとおりのことが、あなたの友だちの声で、聞こえてくると、そう思ってみてください。…… わたしは、神さまが、私たちの日常を二つに分けるようにというおつもりだとは、とても信じられないのです。つまり、日曜日には真面目な顔をし、他の日には神さまのことを口に出すことは筋違い、と神さまが考えておられる、とは思えません。あなたは どう思いますか。神さまは跪いているひとだけに目をとめられるのでしょうか、祈りのことばだけをお聞きになるのでしょうか。日の光の中で子羊が飛び跳ねるのをご覧になるのは好きではない、と思いますか？こどもたちが乾し草の中を転げながら上げる楽しい声を、お聞きになるのは好きではない、と思いますか？こどもたちの無邪気な笑い声は神さまのお耳に快いに決まっています。荘厳な歌が厳かな大聖堂の

ほの暗い蠟燭の明りの中から高く上っていくのに耳を傾けられるのと同じように、神様はわたしたちの無邪気な喜びを受け入れて下さると思います。……

1876年の復活祭を前に、『鏡の国のアリス』の中に一枚別刷りで挟み込まれた形のこの手紙の中にキャロルの宗教観の一旦が、よく言い表されている。彼は、こどもの中にある純粋さ、目に見えないものをそのまま素直に受け入れることのできる心、を愛した。これより先、1869年には、ずっと短い『クリスマスのお手紙』を、妖精シルヴィーが子どもに宛た形で詩に書いている。

優しいあなたへ。もし妖精が／ ふざけ
遊びといたずらを／ ほんのひととき休
むとしたら／ それは楽しいクリスマス
の日

やさしいこども、いとしい子／ 子どもの
声が告げている／ 昔々クリスマスの
日／ 天から知らせがありました

めぐってくるよクリスマス／ 子どもら
ふたたび思い出す／ 喜ぶ声が鳴り渡
る／ 「地に平和あれ 人には善意」

初めの3節は、現在、キャロルが生まれた
デズベリにある教区教会のステンドグラス
の一部に、掲げられている。続く第4節で、
よい子にとっては、1年中が楽しいクリスマス
である、と続ける。

天の使いが 宿るのは／ こどものまま
の 心でしょう／ 喜びおどる こども
らに／ 一年中が クリスマス

こどもは、単におとなになる準備段階の粗
雑な器であり、大人をモデルとした形づけを

するもの、というのが、ヴィクトリア朝の一
般的な子ども観であった。「子どもは見て可
愛く、おとなしく、ものを言わない」—
Children are to be looked at, not to be
heard — のを良しとする時代にあって、キ
ャロルは、こどもをそれ自体で完結したもの、
と考えた。汚れないこどもは神に近い、純粋
な存在、とする彼の考えを抜きにしては、キ
ャロルと子どもとの関わりに対する正しい理
解はない。

そこまで子どもの存在を高めてみることは、
この時代にあってユニークである。しかし、
既にモートン・コーエンが著書『ルイス・キ
ャロル伝』で詳述しているように、キャロル
のこのような子ども観は、ひとり彼だけのも
のではない。彼が好んで読んだ詩人たちの中
でも、ウィリアム・ブレイク、コールリッジ、
ワーズワースは、その詩の中で、汚れない子
どもの魂を歌っている。

ルイス・キャロルと子どもとの出会いは先
に書いたとおり、11人のきょうだいの中で
始まった。上に姉が二人いて、彼は3番目に
生まれた長男である。下には弟が3人、妹が
5人いた。ジョン・バドニーの *Lewis
Carroll and His World* 『アリスのいる風景』
の訳者石毛雅章氏は、その訳者あとがきの中
で、きょうだいの中のキャロルについて、先
ず、きょうだいについてその名前と生年、没
年を挙げた後、次のように指摘している。
「この兄弟姉妹のリストを眺めてみると、彼
が4歳になるまではまわりに男子がひとりも
いなかったことがわかる。そこにいたのは、
8歳、6歳、3歳の3人の少女たちだけだっ
た。やがて数は11人に増えたものの、やは
り圧倒的に女性が多い。この少年少女たちの
ために、チャールズ（キャロル）は一生懸命
お話しをしたりゲームをかんがえたりしてい
た。したがって、後年少女たちを相手にやっ
てみせたことは、実はクロフトの牧師館で少

年時代にしていたことと全く同じこと」だった。そしてもう一つ、このきょうだいのリストからわかってくることは、「矢継ぎ早に子どもができて、一人の子が母親を占有できる期間はごく短いものにならざるをえない。チャールズの場合すぐ下の妹キャロラインが翌年生まれているので、一年足らずで母親の膝を追われてしまったことになる。」そして、母の膝元は幼児にとってほとんどの望みが実現するところ。そのことによって、幼児は自分を全能者と思い込む。母の膝を追われた幼児チャールズは「全能の自分こそ本当の自分の姿だと思い」、その自分への熱い思いが、周囲を支配せねばやまない気持ちへ駆り立て、として、子ども時代に遊んだ複雑な規則の鉄道ごっこや、後の写真術への没頭、そして写真を止めた頃に始まる論理ゲームを同じ観点から説明した。訳者の解説する「全能感への執着」という観点は、非常によく言い表されていることば、ではある。たとえば、画家ガートルード・トムスンとの関係についていえば、キャロルは、ちょうど、父親のように、命令的な態度で接していた。ただし、それだけでは、言い足りないものがある。そのことを訳者は、「学問上、創作の上で、また社会的に認められていることが、彼に精神的なゆとりを与えて、その行動を社会的規範の中にとどめていた大きな理由」、とみている。これは、キャロルを分析する上での大方の指摘であろう。「分析」すなわち、肉を落とし骨格をわかりやすく提示するもので、それによって一般化し、他との共通項を見出す努力でもある。分析の過程で、捨てられた部分の中に、実はスープのエッセンスが入っている。骨格は、見通しは良いが、旨みはどこにも残ってはいない。

キャロルがかりに全能の態度を取りたがったとしても、それは、自己の満足というより先に、相手にとってもっとも良い、と思うこ

とのために苦心をした。その結果が自分の満足でもあった。勿論、誰にとって何がよいか、は主観の問題である。トムスンは、キャロルのそうした命令的な口調や態度を嫌がるより、むしろ、こどもたちがそうするように、楽しんでいた。

モートン・コーエン編集のルイス・キャロルの思い出を収録した『ルイス・キャロルインタビューと回想録』の中に入っているガートルード・トムスンの書いた思い出には次の記述がある。

ルイス・キャロルは優れたアマチュアの写真家であるばかりか、熱心にこどもをスケッチしました。時には、何も着ていない(dressing in nothing) 場合もありました。キャロルはあるとき、ノエル・ペイトン卿のこどもの話を聞かせてくれました。それによれば、ペイトン卿のこどもたちはみなたいそう綺麗で、卿がキングズリーの『水のこども』のための素敵な挿絵を2枚描いたとき、そのモデルは卿のこどもたちでした。妖精が水の中を漂っている場面では、一番前に出ていたのが、卿の幼いお嬢さんだったのです。それに気付いた一家の友人が、「あら、あれはあなたね!」という、子どもは「そうよ、わたしよ!いつもあんな服(nothing)でいるのじゃないけれどね。」

キャロルが話したかったのは、その天真爛漫のほほえましさである。着衣のない写真を撮る、あるいは絵を描く、ということは芸術家の世界のことであって、その絵なり写真なりに対する評価はここではできない。ただ、ルイス・キャロルについて、そのような写真なり、絵なりを撮ったり描いたりすることに対する好ましくない批判があることは事実である。それに対する答にはならないが、次のことは、述べておこう。ガートルード・トムスは先の記述の続きで、こう書いている。

「キャロルは手紙でこう言ってきました。もしもエディが、ほんのわずかでも、挿絵のためのモデルにためらいを見せることがあったら、やめて欲しい。説得しよう、とか、そんなことは絶対にしないように。もしも、彼女にそのような気持ちが生じたら、その子の同意を得ようと説得にかかることは、神の目には犯罪となる。」

キャロルは、それを crime と、言った。

ルイス・キャロルの手元に残ったこどもの写真で “dressing in nothing” は、本人のことを配慮して、キャロル自身の手で、或いは遺言で指示された通り薬品によって処理され、すべて処分された。現在わかっているのは、アメリカのフィラデルフィアにあるローゼンバック・ミュージアムに残っている4点だけである。それは、ハッチ家並びにヘンダーソン家が所有したもので、写真が世に出たのはキャロルのせいではない。「でき上がった写真は、居間に掛けておける、人に見せて美しいもの」であること、それが彼の信条であった。ハッチ家でもヘンダーソン家でも、これを処分することは考えなかったのだ。

モートン・コーエンは1978年の著書、『こどもの写真家、ルイス・キャロル』の中で、キャロルがガートルード・トムスンに宛たもう一通の手紙を引用している。

イーデイス・ボール（トムスンのモデル）についてのあなたの手紙を読んで、ぜひ書いておきたいことがあります。もしも、彼女が少しでも憤りか何かのために後込みするようなことが起きたら、どうか、私の本の挿絵のために彼女をnudeで描くことは、絶対にしないでください。そうした場合のこどもの本能は、もっとも大切にして、尊

重すべきものです。この世にもっとも美しい子どもがいて、その子を絵に描くとか、写真に撮ろうとした場合に、どんなにわずかでも、簡単に納得させられるようなささやかなたじろぎでもある場合には、私は即座に止めることが、神の前に厳粛に自分の果たす務めである、と思います。

こうしたルイス・キャロルについては、あまり知られていない。

Note :

- 1) Information from Dr.Selwyn Goodacre on the orders of Church of England.

Bibliography :

Lewis Carroll, *Sylvie & Bruno Concluded*, 1898, Macmillan and Co.

Roger Lancelyn Green, ed., *The Works of Lewis Carroll*, 1965, Paul Hamlyn, London.

Morton N. Cohen, ed. *The Letters of Lewis Carroll*, 1979, Macmillan.

_____ *Lewis Carroll, Photographer of Children*, 1979, Potter.

_____ ed. *Lewis Carroll Interviews & Recollections*, 1989, Macmillan.

_____ *Lewis Carroll, A Biography*, 1995, Knopf, New York.